

## 15) モッコク=木斛

モッコクはツバキ科の常緑小高木で、関東以西の本州、四国、九州、沖縄の海岸近くの山野などに自生する。枝ぶりが良く、また樹形も美しく整うところから庭木としても植えられている。高さは 5m ほどになり、長楕円形の葉は長さ 5cm ほどで、光沢のある厚い革質で互生し、先端は丸みを帯びる。初夏、葉腋に小さな黄白色の 5 弁花を下向きに咲かせる。11 月頃、球形の果実は赤く熟し、裂開すると中から濃赤色の種子があらわれる。和名の由来はラン科のセッコクの香りに似ている芳香を放つことから、石斛に対して木斛の名が与えられた。別称としては材が赤いことからアカギとか、果実や種子が赤いところから、アカミノキなどと呼ばれており、愛媛県ではホオズキとも呼んでいる。これは果実の柄が長く、赤い果実の実った様が、あたかもホオズキが実った姿に似ているからだろう。また千葉県ではクロマツなどとも呼ばれる。学名は『*Ternstroemia gymnanthera*』で、属名は 18 世紀スウェーデンの自然科学者テルンストロエムの名に因む。種小辞は雄蕊のヤクが裸のという意味で、中国での呼称は『厚皮香』である。

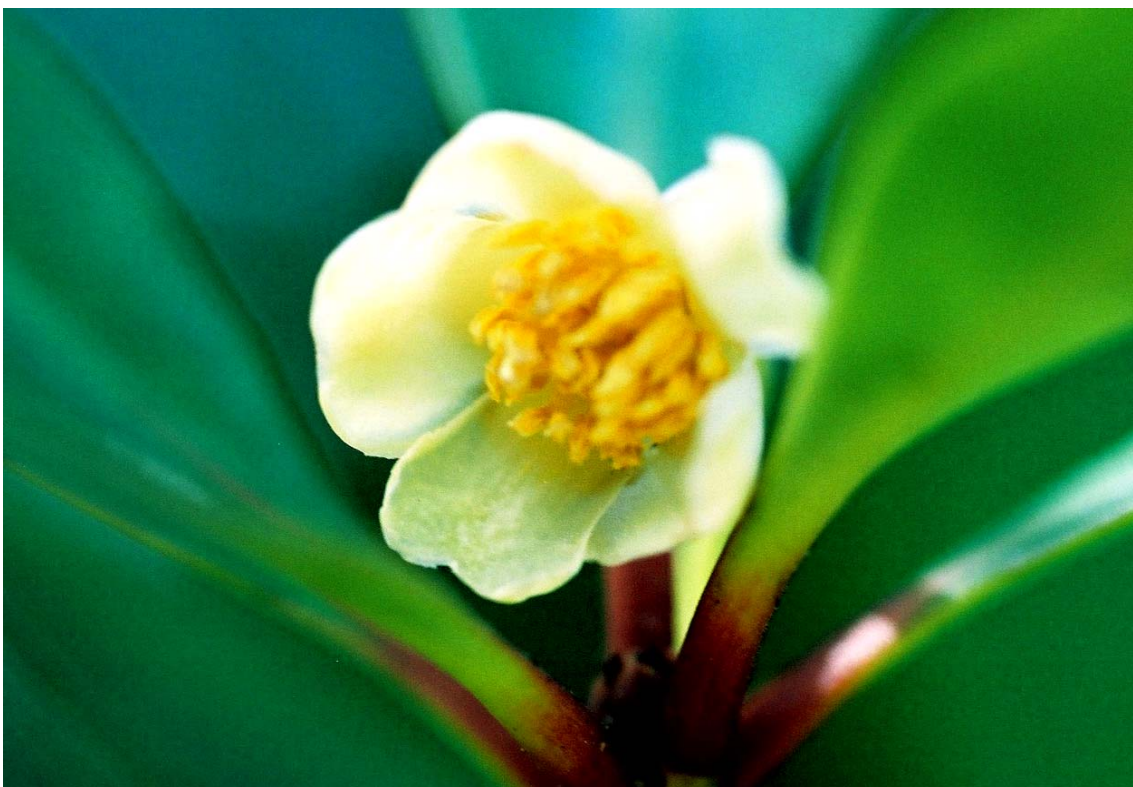
モッコクの花には強い芳香があるところから、かつては厄除けの靈験があると信じられていた。このため『仏法の木』などとも呼ばれ、現在もブップイスなどと呼ぶ地方もある。材は重くて堅く、建築用材として床柱などに、また器具や寄木細工のほか、櫛や上質の薪炭などに用いられてきた。樹皮にはタンニンが多く含まれており、八丈島や三宅島などでは茶褐色の染料を取るのに用いられた。

モッコクは庭木としても珍重されてきたが、成育は極めて遅く、このため高価な木に属する。また樹形が美しく、秋の赤い果実も風情があったところから、庭木の王様としてあがめられ、庭園樹や公園樹としてもしばしば用いられ、江戸時代には江戸五木の一つに数えられていた。因みに他の四木とはアカマツ (07-01-01 松の項参照)、カヤ(07-01-04 カヤの項参照)、イトヒバ(学名は『*Chamaecyparis pisifera*』)、イヌマキ(学名は『*Podocarpus macrophyllus*』 =07-01-07 コウヤマキとラカンマキの項参照)で、どれも花がほとんど目立たない常緑樹である。19 世紀中葉の江戸の屋敷街は外国人が感嘆するほど美しく、現在の麻布や麴町、御殿山、赤坂などの武家屋敷には、こうした樹木が程よく繁って、心地よい空間を作っていたのだろう。

さてこれは余談である。16 世紀初頭の江戸の人口は約 50 万人、幕末で 100 万人程度だったが、江戸城下では 17 世紀中葉にはすでに玉川上水が完成し、これまでの神田上水とともに江戸城下に十分な飲料水をもたらすことが出来た。これはニューヨークの上水よりも 200 年も早かったことになるから衛生面でも欧米に勝っていた。道路などの整備も同様で、江戸城下はもとより、日本橋から各地方へ行く街道もよく整備されており、1633 年ごろに確立された幕府の公用便でもあった『継飛脚』(ツギビキヤク)の場合、江戸と京都の所要時間は、天候上の問題がなければほぼ 3 日程度であった。



モッコクの花は小さな花だが、美しく芳香がある。しかしこれも暖地性の樹木で関東以北では急に数が少なくなる(さいたま市浦和区)。



モッコクはツバキ科だけあって、近くで見るとツバキに似ている(さいたま市浦和区)。



赤く色づいたモッコクの果実。モチと同様に汚れやすい(埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)